

国語

→ 全学年 | 「話すこと・聞くこと、読むことの学習として」

年間計画の中に「音読」を
上手に組み入れよう

1. 年間計画の中に「音読」が入っていますか？

4月の年度始めに教科書を開くと、必ず「音読」を前提とした物語や詩が最初に紹介されています。

しかし、最初のうちはしっかりと音読練習を行うものの、1学期が終わる頃には…、というケースも見受けられます。声に出して読むことの教育効果については広く知られるようになりましたが、継続的な学習活動として位置づけるのは難しいようです。

2. 「みんなで発声練習」を楽しみましょう！

「音読」という言葉は2年生から登場しますが、1年生の「あいさつ」から始められます。「しっかりと声を出すこと」や「はっきりした声で、すらすらと声に出して読めるようにすること」が、最初の目標になります。

同じセリフが繰り返される「大きなかぶ」を楽しんで読むなど、発声練習をしながらみんなと同じことができることを楽しむのが低学年です。ことば遊びや語呂合わせ、いろはかるたなど、毎日なにかひとつ、みんなで声を出す活動を続けましょう。

3. 目指そう！ 身体全体で表現する「音読劇」！

声の大きさや高さを意識したり、読むスピードに気を配ったりできることが中学年の目標です。

場面の様子や人物の心情を考えて、「強調するところ」や「間の取り方」まで工夫できれば申し分ありません。身体ほぐしをしたり、即興寸劇を取り入れたり、役になりきって楽しく活動する活動の場面を増やしましょう。

4. 「位置」が変われば扱い方も違ってくる！？

同じ物語でも教科書の中での扱われ方は様々で

す。光村図書4年上では、これまで読書扱いになっていた「白いぼうし」が巻頭に配され、「音読劇をしよう」という単元として位置づけられました。

逆に、「三つのお願い」は、音読単元から「物語を読んで感想文を書こう」という単元に生まれ変わっています。しかし、「物語中に三回出てくる『どんぴしゃり。お願いがなかった。』を、どのように読み分けて音読すればよいだろうか」という課題を設けるだけで、音読の仕方だけではなく、読解としての読みの学習もぐっと深まっていくはずですよ。

5. 「音読」と「朗読」は、何が違うの？

物語の登場人物の様子や心情などが伝わるように声に出して読むことが「音読」だとすれば、その物語を読み、自分が感じたことや考えたことが表れるように声に出して読むことが「朗読」です。

聞き手に自分の思いや考えが伝わるように読むことが高学年には求められていますが、さらに、朗読する内容を暗唱して、身体全体で「語り」ができることを目標にしている教科書もあります。

6. 音読のための音読練習では意味がない！

スキルアップとしては、説明文の音読も大変重要になります。できるだけ客観的・中立的に、聞き手に伝わるように読むには、かなり意識的な練習が求められるからです。

年間計画の中で、どの教材文が「音読に向いているか」、さらに、「どのような音読練習を行うのに適しているか」も考えておくといいでしょう。ただし、音読することの本来の目的は、スキルアップではありません。「どうすれば楽しく読めるか」であることをお忘れなく！